

いろいろな色に光るクリスマスツリー

広島大学附属三原幼稚園（広島県三原市）

[4 歳児]

【エピソード1】見つけた影で影当てクイズをしてみたよ

ピンクの色がついた透明な卵パックを使って製作をしたA児が、それを大事に外へ持って出ると、「先生、見て！ピンクの影になってるよ！」と発見し、保育者に伝える。保育者も「本当だねえ！すごいねえ！これをみんなに、クイズにしてみる？」と言うと、A児も「うん、うん」と答える。その影を保育者がデジタルカメラで撮り、次の日にみんなで見当てるクイズをする。「ええっ？何かピンクみたいな色がしとるね」「色水？」「ピンクの箱？」などの答えが出てくるが、昨日A児と一緒に遊んでいたB児が、「あっ、わかった！卵パックじゃ！」と答える。



【エピソード2】虹の影を見つけたよ

子どもたちがヨーグルトカップなどの空容器の底に水性マジックで色を付け、それに水を入れて色水遊びをしている。作った色水を次々に外の机の上に置いていた時、そこに日光が当たり、机の下に虹色の光が映っていたのを子どもたちが発見する。

「見て！見て！虹ができたよ！」という声に、そばにいた他の子どもたちや保育者も見に来る。「わあ、すごいねえ！きれいだねえ！」とみんなつぶやき、保育者は「えっ？どうしてこんな所に虹ができるの？」と尋ねてみる。すると、色水を作っていた子どもたちが机の上に並べていた色水の入ったカップを一つずつ動かして見せる。

虹色の光が動いた時点で「あっ、これだ！この色水が光っているんだ！先生は、虹はお空にできるものだと思っていたけど、みんなが虹を作ったんだね」と言うと、子どもたちも「うん、そうだよ。虹色マジックだよ」と言う。その様子をデジタルカメラで撮り、保育室に掲示する。

「ここに虹色ができたんよね」と写真を見ながら話す姿が見られる。



見て、見て！虹の影が出来るよ！

エピソード1・2のように、子どもたちが発見したものをデジタルカメラで撮っては保育室に掲示したり、影当てクイズをして楽しんだりすることを積み上げて来た。そのことで、子どもたちは家庭でも身近にある光や影に気が付いては、朝登園するなり発見したことを保育者に話す姿が見られるようになってきた。

【エピソード3】ステンドカラーシールで遊んだよ



みんなで黒い紙でクリスマスツリーを作り、透明シートの部分にステンドカラーシールを貼って遊ぶ。できあがったものを廊下に持ち出して日光に当ててみると、下にカラーシールのいろいろな色が光ることを見つけて、いろいろな所で試してみる姿が見られる。「廊下の前の白い所（壁）できれいな色が見えたよ」「すべり台の所で海みたいに見えたよ」「きれいな色で光ったみたい」「廊下の下のグリーンの所で、全部光ったよ」など、いろいろな光の美しさや、いろいろな場所で光る面白さを感じている姿が見られる。

きれいな色が見えるね！

エピソード2・3のように、様々な素材を自発的あるいは意図的に使うことを通して、様々な光ができることに気付いては感動したり、いろいろな所で光がどのように映るかを試してみたりする姿が見られるようになってきた。

【エピソード4】クリスマスイルミネーションの映像を見たよ

保育者が撮った美しいイルミネーションのビデオ映像を、保育室を暗くして大きなスクリーンに映し出して子どもたちみんなで観る場を設ける。「わあ、きれいだねえ！」「ぼく、これ見たことあるよ！ここに行ったことがあるよ！」「わたしはね、違うのを見たことがあるよ」など映像を観ながら様々なことをつぶやいている。また、保育者が「きれいな光だねえ。どんな色の光が見える？」と尋ねると、「きいろ」「みどり」「あか」「しろ」など様々な色が光っていることに気付く。

保育者自身が実際に見て感動した映像を子どもたちとともに観ることで、保育者自身の語りかけが感動を伴ったものになることが実感できた。そのことが、子どもたちに美しいものを美しいと感じる感性を育むことにつながるのではないだろうか。

【エピソード5】みんなでいろいろな色に光るクリスマスツリーを作ったよ

イルミネーションの映像を観た後に（エピソード4）、実際にみんなでいろいろな色に光るツリーを作る。円錐形のツリーの土台はあらかじめ保育者が作っておき、その上から子どもたちはいろいろな素材を使って貼り付けていく。

- ・透明シートの上にステンドカラーシールで幾何学模様のような形、ツリーの形などを構成して貼る。
- ・いろいろなカラーセロファンを貼る。
- ・透明シートの上にマジックで一色や虹色で色を塗ったり、星・三角・ツリーなどの形を描く。
- ・透明シートの上に、シールやマジックの絵を組み合わせで構成する。



など、できあがった円錐形のクリスマスツリーの内側に点滅ライトを入れ、暗くした保育室で様々な色に光るツリーを観る場を設ける。子どもたちはしばらくじいっと静かにツリーの様子を見ながら「きれいだねえ」「いろんな色に光ってるよ」などつぶやいている。

いろいろな色の光が点滅するその神秘さをしっかりと感じて欲しいと願い、保育者は点滅の光がよく映えるように保育室を暗くしたままクリスマスにちなんだ口演童話を語る。

口演童話の際には子どもたちはじいっと話を聞いていて何を語るでもないが、保育者自身が子どもたちと共に神秘的な雰囲気を感じたひとときであった。光と影に関して「こうやってみたらこうなったよ」というように試したり工夫したりするという姿が直接的に見られるような活動ではないが、光と影は時に理屈を超えて美しく、神秘ささえ感じることがある。このような自然に対する感動を子どもたちと保育者が共有するというひとときも大切ではないだろうか。

【考察】

保育者自身も光と影の美しさに感動しながら環境構成を考えることで、子どもと共に光や影の美しさに共感でき、子どもにとっては保育者の共感が何よりも嬉しく、さらにきれいな光や影を見つけようとする意欲を高めていることがわかった。また、子どもたちは保育者や友達に自分の発見を認めてもらうことで、自分が発見したことを価値付けてもらうことの喜びを感じ、その喜びが自信をもってさらにかかわろうとする姿につながっていくことがわかった。

子ども自身の感動や発見をしっかり受け入れると共に、子どもの興味・関心に応じた素材の提示の大切さもわかった。今回は、知りたがりやの時期にある4歳児にとって、子どもたちの発見をクイズ形式で提示することは子どもたちの好奇心を刺激するという意味では有効であったと思う。

また、私たちは「科学する心」を“不思議に思っ て試したり工夫したりしながらかかわってみようとする”と定義し、いわゆる行動面の育ちまでを期待している。しかし、クリスマスのイルミネーションの事例にあるように、時には理屈を超えた美しさや神秘を感じるひとときにじいっと浸ってみるという体験も大切なのではないだろうか。何故ならば、自然そのものがそのような特性も持っており、このような特性は人間の科学を超えたものであるという現実に触れた時、人は自分たち人間も自然の一部であるということを実感し、自然に畏敬の念をもちながら科学する心を育てていくことができるのではないだろうか？と捉えているからである。

みどころ

子どもたちが遊びの中で様々な光や影を発見し、その不思議さや美しさに興味・関心が高まっていった様子がわかります。保育者が子どもの感動を見逃さず、共感したり他の友達に広めたりすることで、さらに遊びが広がっていきます。幼児期の「きれいだな」「どうしてだろう」「どうなるんだろう」といった感覚や感性を揺さぶる体験は、物事を良く見たり追求したりする心の育ちにつながります。